

# 「もう一度、サッカーを」

## 大阪の中学生 震災のハイチ気遣う

昨年1月のハイチ大地震で被災したハイチの子供と、昨夏、ハイチの隣国ドミニカ共和国で交流した中学生サッカーチーム「FC千里中央」(大阪府)の選手たちが、来日したハイチ人の歯科医マック・ケビン・フレデリックさんと再会した。大阪府豊中市であった交流会で、選手たちは「ハイチの子供たちは今どんな気持ちなのか」などと質問した。

【石戸諭】



ドミニカ共和国で  
昨年夏に親善試合

国際医療救済団体「AMDA」(本部・北区)は現地で緊急医療支援、義足支援などに取り組み、昨夏、被災した子供たちを励ますととサッカー交流を企画した。ハイチでプロジェクトを担当したAMDA職員で義肢装具士の八尾直毅さん(30)、義足を提供されたハイチ人学生ガエル・エズナールさん(18)、フレデリックさん

ガエルさん(右)、フレデリック氏(右から2番目)の話聞く選手たち

ららが今月来日した。選手たちに「いまでも食料、学校、病院が足りない。支援が行き届いていない」「大統領選挙の影響で昨年末は暴動が頻発した」などと現地の様子を伝えた。

昨夏のサッカー交流でハイチの子供たちを引率したフレデリックさんらの報告を聞いたFC千里中央の東川健祐君(13)は「(ハイチチームの選手は)『ハイチに帰りたいくない』と言っていた。その後、戻ってどんな気持ちなのか。ドミニカで良いホテルに泊まって良かったのかな、と考えます」と質問。八尾さんは「彼らにとって君たちとサッカーをしたのは大きな経験だった。『楽しかった。またやりたい』と言っている」と語った。